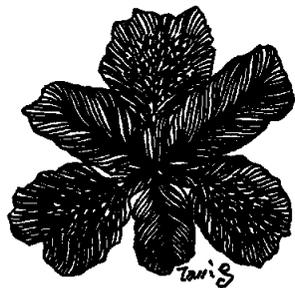


# 石狩川の鳥

島田明英



ひと口に石狩川の鳥といっても、長大な  
河川であるから、河口から源流の石狩岳の

高山帯にいたるまでさまざまな環境を含み  
それぞれの環境にはそこに対応した種々の  
鳥相が見られる。しかし、現在までに石狩  
川の全流域を対象とした鳥類調査はもちろ  
んなく、断片的な報告がいくつかあるのみ  
である。

私は一九七八年より石狩川の中、下流域  
で調査を始めたので、その結果の概略を述  
べる。

## 中、下流域の陸鳥

夏期に旭川より下流の石狩川において、  
河川敷に生息する鳥類の調査を行った。

中、下流域の河川敷の植生は、ヤナギを  
主とした河畔林や様々なタイプの草原にな  
っており、それらがモザイク状に成立して

いる。また人の手によって裸地になったり  
放牧地になっている場所も多い。

夏期の調査では五十八種の鳥が記録され  
た。このうち、河口で見られないシギ  
・チドリ類などを除いた、中、下流域で広  
く見られる種は四〇種程度である。スズメ  
目の種が多く、全体の約四分の三を占める。  
種類の構成や個体数は調査地によって異  
なるが、中、下流域を通じて広く見られ、  
個体数の多かった種はカワラヒワ、ムクド  
リ、ハシボソガラスといった環境選択の幅  
の広い種であった。この三種で観察全個体  
数の三〇〜六〇%を占めた。

よく発達した河畔林では、アカハラ、セ  
ンダイムシクイ、シメ、シジュウカラ、ア  
カゲラなどの森林性の種が見られた。これ  
ら森林性の種の個体数は少なく、河畔林を  
中心とした調査地においても、全個体数の

一〇%前後を占めるにすぎない。また、このような森林性の種が、生息できるような河畔林自体があまり残されていない。

草原性の種としては、ヒバリ、ノビタギ、ホオアカ、コヨシキリ、ノゴマ、オオジョリン、シマアオジなどが記録された。特にヒバリ、コヨシキリ、ホオアカは個体数が多かった。草原性の種の個体数が全体に占める割合は、下流の草原を中心とした調査地では三〇〜五〇%と高い割合を占めた。

石狩川の鳥相を、周辺の農耕地の鳥相(美唄における藤巻の調査、一九七三)と比較すると、美唄の農耕地において記録された二十八種のうち、二十六種が石狩川と共通の種である。石狩川では農耕地との共通種以外に、カルガモ、アオサギ、カモメ類、シギ・チドリ類などの水鳥が多い。

石狩川中、下流域で記録された種のうち一年中北海道に生息する留鳥は一〇種に満たない程度であり、大部分は夏鳥である。そのため、冬期の鳥相は非常に貧弱になると思われる。

## 夏〜冬の河口の鳥

河口において夏〜冬にかけて、水・渉禽類を中心とした調査を行い、七五種の鳥類を記録した。七五種の内訳は、ガン・カモ類一二種、ワシ・タカ類六種、シギ・チド

リ類二四種、カモメ類八種、スズメ目一九種、その他である。

観察される種類数の変化は、八月には二〇種程度であるが徐々に増加し、九月上旬には、最高三六種を記録してピークに達した。これはシギ・チドリ類の渡来が多くなったためである。その後、夏鳥の渡去、シギ・チドリ類の渡来の減少により徐々に種類数は少なくなり、十一月上旬には一〇種以下になった。冬期には、カモメ類やカモ類など数種が見られるだけになった。

ガン・カモ類では九月中旬には、マガモ、カルガモ、コガモなどが渡来するが、これらの種は岸近くの水深の浅い水面や湿地で採餌する淡水カモ類なので、狩猟の影響を強く受けるためか十月以降はほとんど出現しなくなった。それにかわって十月中旬からは、キンクロハジロ、ホオジョロガモなどの海ガモ類や、カワアイサなどのアイサ類が渡来した。これらの種は冬の間も少数が見られた。石狩川河口で記録されたガン・カモ類は全部で二三種、最多個体数は七一羽と、種類数、個体数ともに多くない。カモ類は上流の美唄、江別などに残る石狩川の河跡湖などに多い。

ワシタカ類ではトビが普通に見られ、特に九月〜十月上旬に個体数が多くなるようであった。十一月以降は、ほとんど見られ

なくなつた。トビ以外には、ミサゴ、チュウビ、チゴハヤブサ、ハヤブサ、チョウゲンボウが、それぞれ単独で飛来したのを記録した。

シギ・チドリ類は二四種が記録された。秋の渡りは八月初旬から始まり、九月初旬がピークになった。このころには一日に一五種、一〇〇羽前後が記録された。その後徐々に減っていき、十一月半ばで渡来は終わった。個体数は渡来の終わる直前の十月末〜十一月始めに急激に増え、二つめのピークをなした。これは、この時期にハマシギの大群が渡来したからである。個体数の多い種は、ハマシギ以外に、メダイチドリ、ダイゼン、オグロシギ、オオソリハシギなどであった。ハマシギ以外の種は、九月が渡来のピークであった。

カモメ類は九種が記録された。一年中、河口で見られ個体数も多い。十月に特に多くなり、一〇〇羽を越すこともあった。八月〜十月にはウミネコとユリカモメ、特にウミネコの個体数が多く、常にカモメ類全体の半分以上を占めた。しかし、ウミネコとユリカモメは十一月初旬以後は激減しほとんど見られなくなつた。かわって十月中旬からカモメの個体数が増え、十一月以後はカモメ類の中でカモメの個体数が最も多くなつた。

スズメ目の鳥では、ヒバリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラスの個体数が多かった。他には、コヨシキリ、ホオアカ、オオジョリンといった草原性の種が多かった。ほとんどの種が夏鳥であるため、十月中旬に本州以南へ渡去し、冬の間も見られるのは、カラス類、ムクドリ、スズメくらいである。

\*

以上に石狩川中、下流域の鳥類調査の概略を述べたが、これまでの調査だけでも約一〇〇種の野鳥の生息が確認されている。これに上流域の鳥を加えれば、さらに多種の鳥が生息しているのである。また、河口は、道内では数少ない干潟として、シギ・チドリ類などの渡り鳥の重要な渡来地である。このように野鳥の豊かな石狩川であるが、その自然が十分に保護されているとはいえない。河川改修、グラウンドの造成など様々な理由で河川敷の植生は破壊され、裸地化しているところも少なくない。水害の防止や産業用水として、また都市近郊に残された貴重な空間として石狩川はこれからも人の手が加えられ続けるであろうが、野鳥をはじめ多様な生物が生息する環境としての価値を認め、それが維持されるような方法で管理が行われていってほしいものである。

(北海道自然保護協会)